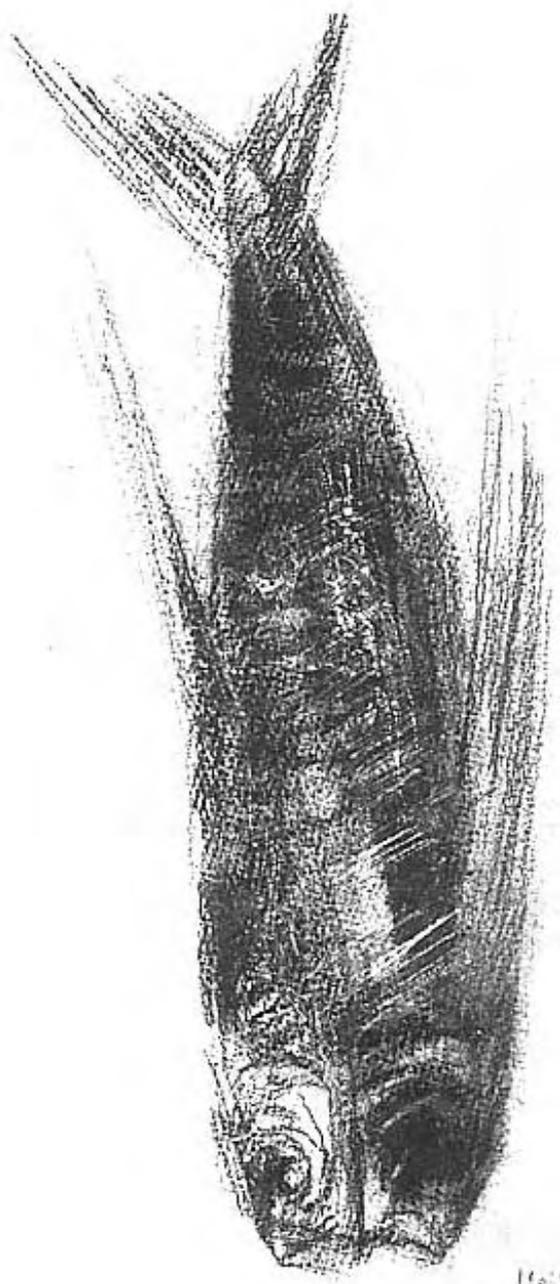


昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成17年8月5日発行(毎月5日1回発行)
第45巻8月号(初巻503号)

風土



夏
祓
神
蔵
器

西行峠七星てんたうむし放つ

羅の消ゆる鎌倉文学館

合歡咲けば十三回忌兄に来て

「名月記」以後に咲き出て沙羅の花

迅雷の申来て女の髪匂ふ

父死後も山へ向きたる籐寢椅子
太宰忌の近づくほたるぶくろかな
蝸牛光悦垣の大うねり
民権の発祥の門夏つばめ
大南風朝礼台を吹きさらす
空梅雨か真つ赤な花の地に着きて
八つはりのとり裂く音も夏祓



竹間集

同人作品



初夏

徳丸峻二

火薬庫の軒蝙蝠の出入りかな
母の日や厨に水の音やわら和か
釣堀の昼どき父を呼ぶ子来て
「魔王」てふ甘藷焼酎の棚にあり
麦の秋引越し荷物に鋏と鋤
うしろ手に母の近寄り柏餅
運び込む大き塑像や夏の雨

小判草

宮川みね子

あやめ咲く「むくさのその」に水の音
くわんおんの厚きまぶたや朴の花
白炎をあげ泰山木の蓄かな
小判草まぢまぢにゆれゆれやまず
篝火〔船井庵二句〕の天を舞ひけり薪能
涼しかり静御前の中之舞
薪能知盛の靈闇に消ゆ

基地の海

浜 明 史

ふとこころに風入れ亀を鳴かせをり
川狩るや復旧なりし流れ橋
その奥若菜・熊川節に十葉を干す長屋道
カツターを漕ぐ声の和や基地の海
栗咲くや医療酸素の点検日
籠の鳥鳴けり網戸を張り直す
行く末はなんぢやもんぢやの花に聞け

牡丹

— 鈴木 石花 —

葉桜や四百粒の旅支度
明易き鶏鳴を背に新車発つ
カーナビに従ふ運転麦の秋
新緑のみちのく目指す高速道
矢印の先の目印吹流し
日本鶏出展公園芝青し
余花に逢ふみちのくのひと美濃の人
四国より鶏連れて来し夏帽子
副賞の牡丹紅白鉢並ぶ
鶏五百犇き競ふ薄暑かな

小学生唱歌の牧場風薫る
名物のソフトクリーム二つ買ふ
皇室に所縁の牧場橡の花
道標にあと四粒の牡丹園
並び来し夫ぼうたんに見失ふ
鶏飼ひのをみな同志や鮎の宿
蚕豆や漢五人の鶏談義
短夜の駐車場より鶏の声
青嵐高齢マークの車越す
老鶯や手作りバターの土産開く

山河集

同人作品



神蔵
器選

えごの花ちるささかたに蜘蛛の道にかな
石柱のひとつ「紀の川」うつき咲く
花桐や真名仮名本の古今集
凌霄花や鏝に刻める隠れ耶蘇
籠堂障子しろじろ夏を断つ

下山田美江

一人づつ鍵もつて出る夏燕
薫風や犬の鼻先よく動く
ハンカチの木より涼風広がれり
合歓の花僧は生涯合掌す
挿木して体温いつも三十五度

柴田 久子

夏来たる応接室の大鏡
坂を来て牡丹の闇濃かりけり

古河 邸

井口ふみ緒

飛鳥山に座るD51桜の実
明治大学
大学は硝子の城や五月来ぬ
青梅の後楽園に一つ落つ

内山まり子

梅雨空の雲に濃淡ありにけり
盗人に内緒のはなし夏の月
えご咲いて右へ曲れば双絮庵
弁当を無心に食みて行々子
連れだちてメダカの学校覗き見し

柿沼 盟子

藍染の干場二列や雪柳
白玉や谷中の坂は名前もつ
音読の『剃刀日記』青嵐
初夏の舌に手強き江戸ことば
小満や四筋に折りて神籤結ふ

風土独語／神蔵 器



水飲みて喉の立ちたる落花かな

竹生田勝次

(七月号より)

「喉の立ちたる」は見事な把握。鋭い感覚である。「旨いもまずいも喉もと三寸」とも言われるが、通常喉の存在はいちいち意識しないものである。しかし三、四月頃の水は冬の身を切るような冷たさもうすすぎ、快く爽にいい。朝の水や少し喉の渴いた時の水など、思わず水を迎えてごくりと飲み下す。まさに喉が立つ。いのちの喜びである。「喉が鳴る」「喉から手が出る」などのたとえの他に、喉の歡喜の象徴としてこの句の「喉が立つ」が新しいフレーズになりそうだ。

鯖街道程なく京や葱坊主

奥田 弦鬼

(七月号より)

鯖街道は若狭の小浜市の泉町を起点として熊川、朽木、大原、八瀬を経て京まで十八里（七十二キロ）の道のりである。小浜で水揚げされた、主として一塩した鯖を、昔は人間が背負って京に届けたことから鯖街道の名がついた。鯖は鯖の生腐れといわれるほどいたみ方が早いので、京まで背負って運ぶにはなみなみならぬ苦勞があったようだ。それでも八瀬から山科あたりまで来れば京の街もほど近い。まだこのあたりとどこどころに残る畑には葱

が作られ、すでに葱坊主が整然と列をなしている。

文豪の泊りし宿に朝寝かな

三島 順子

(七月号より)

四句欄から採った。伊東にお住まいの作者が「文豪の泊りし宿」と言えば、伊豆・修善寺の「菊屋」ではなからうか。

漱石が松根東洋城のすずめで菊屋に来たのは明治四十三年八月六日であった。一日目は「梅の間」に泊り、翌日からは、その頃新しくできたばかりの別棟に移っている。別棟に移ったその日は体調もよく食事も大いに進んだようであるが、次の日八日には胃痙攣を起こしてしまった。

漱石は四十三歳、これより少し前から、内幸町の長与胃腸病院に一と月半ほど入院し胃潰瘍の治療を受け、ようやく退院したばかりで、このたびの修善寺温泉も療養を目的とするものであった。十七日には大量の血を吐いた。そしていったん小康を得たものの二十四日夕刻にはさらに大量の血を吐き、意識を失い危篤状態におちいった。これが漱石の修善寺の大患である。漱石は後「思ひ出す事など」に「病に生き選ると共に、心に生き選った。余は病に謝した。又余のために是程の間と時間と親切とを惜まざる人々に謝した。さうして願はくば善良な人間になりたいと考へた」とある。

漱石が病臥していた菊屋の部屋は遊園施設「虹の郷」に移築されているが、漱石が初日に滞在した菊屋の「梅の間」は現存している。三島順子さんの家からはゆうに日帰りできるところだが、文豪の泊まった宿に一夜の心の贅を求めたのではなからうか。「朝寝」はこの世の幸福、善良な女、男はかえってこははゆくまい。

えこの花散る蛛トコの道にかな

下山田美江
(八月号より)

竹の子句会で特選に採った。蛛の道は古くは蜘蛛をささがにと呼び、この小道が蜘蛛の糸のように細いことから名付けられたという。竹の子句会の吟行地でもあった六義園での作で、園内で一番高い築山、藤代峠の裏側で、駒込駅寄りの染井門（裏門）から入ると千里場（馬場跡）を通って藤浪橋を渡り山陰橋に至る木下園の中に白いえこの花の散る、文字通りささがにの小道である。

ところで私が竹の子句会での句を特選に採ったのは次の二点に注目したからである。一つはもちろん「蛛の道」である。意味は前に書いた通りであるが、主として蜘蛛についての枕詞として使われて来た。

わが背子が来べき宵なりささがにの

蜘蛛の行ひかねてしるしも（古今恋四）

しかし、作者は六義園の中の「蛛道」、つまり固有名詞として登場させた。側用人柳沢吉保の頭の切れる明るい表の顔にかくされた裏の顔が見えるようだ。第二はえこの花である。新緑から万緑に移るころ、えこは枝の先に白い清楚な花をびっしりとつける。一つ一つの五弁の花はなかなか美しいのだが、全体の印象はわりと地味である。私の子供の頃、えこの実をつぶして、近くの真光寺川に流し、魚を捕る大人がいて、私の中ではいつかえこの木は毒の木になってしまった。それはともかく、えこの花は蛛の道にびったり合う花であろう。六義園の「蛛道」に、吟行の当日、実際に咲いていたのかも知れないが、「蛛道」と「えこの花」を結んだのは作者だけであり、作者の俳句眼である。

えご咲いて右へ曲れば双怨庵

内山まり子

(八月号より)

双怨庵は先師平本くら先生のご自宅である。作者はくら先生から親しく俳句の手ほどきを受けた人である。くら先生が亡くなった後も、何かにつけて双怨庵をお訪ねしていた。双怨庵にはすでに先生のご子息は独立されていて奥様がたった一人で暮して居られたからである。その奥様も昨年お亡くなりになってしまった。

この道は何度も何度も通った道である。右に曲って行けば双怨庵、先生にも奥様にもお目にかかれた。だのに今はもう右に曲って行くことはなくなってしまった。えこの花は今年も咲き充ちて、道幅いっぱい白い落花を敷きつめている。

蜥蜴の尾防犯カメラの下通る

中嶋 陽子

(八月号より)

「天網恢恢疎にして漏らさず」という。防犯カメラは如何に。蜥蜴は防犯カメラの下を何事もなくゆつくりと通り過ぎて行く。

精巧に出来た防犯カメラも所詮は人間が作ったもの、死角もあれば盲点もある。にもかかわらず人間は防犯カメラに頼り、一時の安心を得ようとしている。蜥蜴は人間の愚かさをあざ笑うかのようだ。陽子さんの新しい心境を示した句として注目した。

夏立つやギブスの中を爪伸びる

根岸 善行

朝礼台を動かす八十八夜かな

柿沼 盟子

これらにもふれたかったが、すでに紙面が尽きた。

風土集



神蔵 器選

母性にもありし父性や卯波来る 東京 中嶋 陽子

蜥蜴の尾防犯カメラの下通る

校庭に和太鼓茅花流しかな

馬酔木咲く野口英世の生家かな

冴返る 大志を刻む 床柱

ひよどりの喜怒直情に椿落つ

鞭打たば空の弾けん 山桜

残照を均し代掻き終りとす

銀色に寝かせて在りぬ代田かな

樵芽吹く「三途の川」の早瀬なす

夏立つやギプスの中を爪伸びる

鎌倉の海の白波竹の秋

走り梅雨情に濡れてをりにけり

軽鳧の子の下を大鯉通りけり

雷兆すギプスのとれしばかりの掌

秋田 工藤ミネ子

上尾 根岸 善行

人気なき門跡尼寺の遅ざくら 川崎 持田 琇子

石楠花や女人高野の鎧坂

葉柳の流れに浸る 一枝かな

野茨の花明りして 札所道

ジヤスミンの一枝を持ちて 閨に入る

朝礼台を動かす 八十八夜かな

くれなゐの牡丹崩るる 寺真昼

庭園のいま 万緑へまつしぐら

みみつきの手サンドイツチや山したたる

枝道は 二十歩ほどや 若葉風

東京 遊橋恵美子

源光庵 「迷ひの窓」「悟りの窓」や緑さす

「かぎ膳」にくず切りを喰む 立夏かな

初夏や胸に 錨のペンダント

ハンドフリーにけい線を引く 薄暑かな